

歩む道の先に、すべてはつながっている。



大谷中学・高等学校を卒業した先輩たちが学生時代を振り返りながら、ここで得た気づきや現在の自分に息づくもの、未来へのヒントについて語るインタビュー企画。

第三回は、横浜DeNAベイスターズで投手として活躍し、スポーツ研究職を経て、株式会社BaseballQを設立。現在は東京大学大学院で特任研究員として研究を続けながら、埼玉西武ライオンズのパフォーマンスアナリストとして新たな道を切り拓いている福田さんに、野球漬けだった日々のこと、挫折と葛藤、大切な人との縁についてお話をいただきました。

自分を導いてくれた、偉大な存在。



桑田真澄さんから贈られたグローブ。「49 福田岳洋」と、ベ이스ターズ在籍時の背番号と名前も刺繍されている。

——今日、**KAMEOKA OTANI STADIUM(※1)**の始球式で久しぶりにマウンドに立たれましたが、いかがでしたか？

福田岳洋(以下、福田):こんな風に投げたのは、2013年にプロ野球をクビになって以来でした。もちろん遊びで投げることはあったけれど、こういう舞台で本気で投げるというのは12年ぶりです。

——ナイスピッチングでしたね。生徒や観客の皆さんも釘付けになっていました。

福田: いやあ、でもやっぱり緊張しましたね。「ちゃんと投げないといけない」と思っていたのですが、マウンドに上がって、後ろを振り向いて、バッターを見た瞬間に、もうフォームや振る舞いを忘れてしまっていたんです。それだけ夢中だったんでしょうね。

——今日は桑田真澄さんのサインが入ったグローブを使われていましたね。

福田: そうなんです、桑田さんとはずっとご縁があって。僕はプロ入りする前に香川の独立リーグにいたのですが、その時の監督がPL学園出身の西田真二さんという方でした。PLの先輩・後輩というつながりもあり、ちょうど桑田さんがピッツバーグ・パイレーツを引退して日本に戻ってきたタイミングで、香川に始球式に来られたことがあったんです。僕が完封勝利したその日の試合も見たださって、「いいピッチャーだ」と言ってもらったんですよ。その年、僕はドラフト指名を受けて横浜DeNAベイスターズへ入団することになったのですが、今度は桑田さんが、子どもたちに野球を教えるというテレビ番組の企画で、ベイスターズの寮に来られたんです。そこで、「あの時のピッチャーです」とご挨拶をしました。



「パイレーツのユニフォームを着た桑田さんが目の前に現れた瞬間、すげえ！と思いました」と少年のような表情で語る福田さん。

——そんな再会があったんですね。

福田：まだ続きがあって。その後、僕はプロ野球を引退して早稲田大学の大学院に入ったのですが、それは「研究者を目指すなら、30過ぎてからでも遅くないぞ」と背中を押してくれた、ある先輩の言葉がきっかけでした。少し経って、その先輩が東京大学に赴任することになったのですが、なんとその研究室に桑田さんが研究者として来られていたんです。そこでまた一緒にいる機会があり、「ああ、あの時の！」と。そこからすごく可愛がっていただいて、「福田くん、野球は引退してからの人生の方が長いんだから、これからしっかり研究をがんばりなさい」「謙虚に誠実に生きなさい」と言ってくださったことは、今もずっと心に残っています。

——本当に不思議なご縁ですね。

福田: そうなんです。当時は貯金を使いながら大学院で勉強している状況だったので、少しでも足しになるようにと桑田さん主催の野球教室にも呼んでいただいたり。そんななかで、自分が使っているグローブと同じものをオーダーして僕にも作ってくださったんです。色は黄色をリクエストして、サインも入れてもらいました。僕はもともと阪神ファンだったのですが、桑田真澄を見てジャイアンツファンになったんです。だから、今でも桑田さんに会う時は少年の顔になってしまいますね。

戦力外通告と新たな道の始まり。



5月に開催された「KAMEOKA OTANI STADIUM」開場記念イベントでの始球式の様子。

——引退の時のことをお伺いしてもいいですか？

福田：ベ이스ターズでの最後になった試合で、僕はジャイアンツからめった打ちをくらいました。試合後、監督に呼ばれて「明日からファームな」と言われたのですが、年齢的にも、これはクビだろうなとすぐにわかりました。その夜、用具係だった入来祐作さんと横浜スタジアムのお風呂で一緒になって、泣きながらいろんな話をしたのですが、「まだ野球がやりたいなら最後まで諦めるな」と言われたんです。でも、翌日からもう力が入らなくて。気持ちが切れてしまったんですよね。ファームで若い選手たちが、一軍昇格をかけて真剣に投げている姿を見て、「自分にはもう投げる出番は無いんだな」と悟りました。正直、あと1、2年やろうと思えばできたかもしれないけれど、それは痛み止めを飲みながら40度の真夏のグラウンドに立ち続けるという選択でもあって。諦めるなと言われたのにそれができなかったことは今でも悔しいですが、「ユニフォームを脱げば、あの夏をもう経験しなくていい」と思った瞬間、少し心が軽くなったのも事実です。

2013年10月9日が戦力外通告の日で、最後に全力で投げたのはその年の8月のジャイアンツ戦。「投げた」という実感を持てたのはその日が最後で、今日の始球式はそれ以来の感覚でした。プロ野球を目指すことは素晴らしいことですが、選手としてプレーすることだけが野球ではありません。いろんなかたちで野球を支えている人たちがいるから、プロ野球は成立する。僕は研究が好きだったから、早くユニフォームを脱いだことで、早く勉強を再開できました。

現在は「株式会社BaseballQ」を立ち上げ、プロ野球球団でパフォーマンスアナリストとして選手へ指導しながら、大学院では研究者として、新しい野球の研究を行っています。プロ野球選手として得た経験と、自身の研究の知見を野球界に還元することができ、本当にすべてはつながっていると感じます。そして、そのすべての始まりは大谷高校です。

365日、野球とともにあった高校時代。



——高校時代の思い出で、特に記憶に残っていることはありますか？

福田：今回、改めて思い返していたのですが、僕が通っていた当時の大谷高校は男子校だったんです。正直ちょっと汚いというか、土足でズカズカ教室に入っていく感じで(笑)。入学して教室の扉を開けたら、学ラン姿の男子生徒が40人。その光景を見て、「どないしようかな……」と思いましたけど、同時に「ここで野球をやっていくんだな」という覚悟ができました。授業が終わった瞬間にクラブボックスまで走って、ユニフォームに着替えて、グラウンドに出て行く。ナイターの明かりが付く時間になると外周を走って、練習を終えると22時4分の奈良線・東福寺発の電車に乗るためにまた全力で駅まで走る。そんな毎日でした。

——そんなに遅い時間まで練習していたんですね。

福田: そうなんです。大きなエナメルバッグを背負って電車にギリギリで飛び乗って、高槻の自宅まで帰って。翌朝また6時半の電車に乗って、朝練をして汗だくのまま授業を受けて……そんな日々が365日続いていました。3年生の引退後や年末年始に2、3日の休みがあったけれど、それ以外はずっと野球と授業の日々で、あの匂いやナイターの明かり、講堂から聞こえてくる吹奏楽部の音色を今もよく覚えています。

——本当に野球漬けの毎日ですね。でも、それが楽しかった？

福田: もちろん楽しくなかったです(笑)。でも、仲間がいたから頑張れました。当時は野球部にバタビアコースの部員が3、4人しかいなくて、勉強も大変だったけれど、彼らがどちらも両立してがんばっている姿を見て自分も前向きになれたし、部活も楽しくなりました。本当にいい仲間がいてくれたなと思います。

——今もその方たちとはつながっているんですね。

福田: そうですね。頻繁に連絡を取り合うわけではないですが、今日のような機会に顔を合わせたりすると、やっぱりうれしいです。あの頃一緒にがんばった記憶が、ちゃんと心の中に残っているんだなと感じます。

※1 KAMEOKA OTANI STADIUM

亀岡市稗田野にある2025年5月に開場した大谷中学・高等学校の専用野球グラウンド。両翼95m、中堅118mは甲子園球場と同規模を誇る。



<PROFILE>

福田 岳洋 Takehiro Fukuda

1983年、大阪府生まれ。大谷高等学校から高知大学を経て京都大学大学院へ進学。その後2008年より独立リーグ・香川オリーブガイナーズへ。ドラフト指名を受けて2010年に横浜DeNAベイスターズ入団。2013年の引退後は、早稲田大学大学院へ進学し、NTTコミュニケーション科学基礎研究所(スポーツ脳科学プロジェクト)でリサーチスペシャリストとして活動。現在は東京大学大学院で特任研究員として研究を続けるかたわら、自ら株式会社BaseballQを設立し、パフォーマンスアナリストとしてプロ野球に携わっている。

Interview & Text: Asako Saimura

Photo: Michiko Wakabayashi